

平成28年度の取り組みについて

平成29年9月26日

1. パブリックタグ標準仕様※の策定

※位置情報基盤を構成するパブリックタグ情報共有のための標準仕様Ver.1.0

2. パブリックタグの登録促進

- ・高精度測位社会Pの実証実験との連携
- ・登録申請API・サンプルサイトの開発

1. パブタグ標準仕様の策定（検討内容）

パブリックタグの品質情報（設置位置の測定精度、可用性等）について、設置者及び位置情報サービス提供者・利用者の両方の視点で調査・検討した。

パブタグの品質情報	実 施 内 容
設置位置の <u>緯度経度の精度（絶対精度）</u>	- パブリックタグを設置する際に想定されうる測定方法（5通り）について、測量的手法と比較することで、設置位置の測定精度を検証した - 測定方法により、緯度、経度の精度（絶対精度）は4段階に分類した - 測定方法により、標高の測定精度を3段階に分類した
パブタグ間の <u>相対位置の精度（相対精度）</u>	- 相対位置の精度の考え方、表し方について整理した - 絶対精度同様、測定方法により、相対精度を分類した（5段階）
測定精度の信頼度	- 申請者が作成した情報を登録する。測定精度の分類が高精度であったとしても、その位置情報が本当に高精度であるかどうか判断できない - 公共測量の枠組み（公共測量等の規程の利用の有無、測定者が測量事業者や測量士か）を活用し、間接的に測定精度の信頼度を推定するフローを導入した
可用性の指標	- 高精度測位社会PJ参画企業等に可用性に関するニーズをヒアリングした - タグの給電方法及び点検の有無などの運用方法にベースに可用性の指標を分類した
緯度、経度を用いない場所情報	- 住所や建物名による場所指定が有効性、指定方法について検討した - 唯一性のある場所指定が可能となるよう階層的な表現を導入した

1.1. パブタグ標準仕様の策定（仕様の概要）

- ・ 様々な施設管理者等が個別に設置するビーコンやWi-Fi等の位置特定に利用可能なタグの位置情報や属性情報の標準化
- ・ 標準化した情報をデータベースに登録し、オープンデータとして共有可能なタグを「パブリックタグ」として定義し、その要件及び設置場所の選定、品質情報、登録及び管理、利用方法について規定

目次

1. 総則
2. 用語の定義
3. タグ要件及び設置場所の選定
4. パブリックタグの品質情報
5. パブリックタグの登録及び管理
6. パブリックタグの利用

■ 定義

- ・ 位置特定に利用可能なタグのうち、本仕様に基づき位置情報や属性情報がデータベースに登録され、それらの情報を検索、取得、利用可能な状態にあるもの。
- ・ データベースの管理は、場所情報コードを使用。
- ・ パブリックタグ情報の検索、取得、利用は、場所情報コードだけでなく、タグを一意に特定できるID（MACアドレスなど）でも可能。タグ固有IDの発信や読み出しが可能な機器であればその種類は特に指定しない。

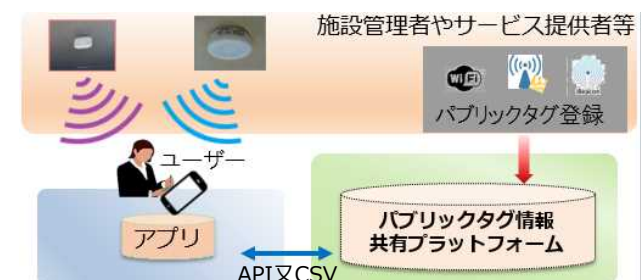
■ パブリックタグの登録及び管理

- ・ パブリックタグ情報の登録及び管理はパブリックタグ情報共有プラットフォームで行う。
- ・ 情報の登録及び管理は、申請者が必要な情報を国土地理院へメール等で送信。



■ パブリックタグの利用

- ・ オープンデータに関する政府標準利用規約（第2.0版）に基づく国土地理院コンテンツ利用規約により提供する。
- ・ 国土地理院コンテンツ利用規約に同意の上、パブリックタグ検索用API又はCSVテキストファイルより情報を取得して利用できる。



■ 品質情報

1. 設置位置の測定方法と絶対精度
2. パブリックタグ間の相対精度
3. 測定精度の信頼度の推定
4. 緯度、経度を用いない場所情報
5. 可用性の指標

2. パブリックタグの登録促進

● 高精度測位社会プロジェクトとの連携による登録

実証実験で設置されたBLEビーコンを標準仕様にに基づき登録した。

また、実証実験参加サービス事業者等へパブタグに関するヒアリングを実施した。

各実証エリアのパブタグ登録数

- 東京駅周辺：約300個
 - 新宿駅周辺：約180個
 - 成田空港：約500個
 - 日産スタジアム：約130個
- (2017年1月時点)



第7回 位置情報基盤WG国土政策局 国土情報課資料より抜粋

● パブタグ即時登録申請APIとそのサンプルサイトの開発

- 登録申請APIのメリット
 - ✓ 一般的なWeb地図やジオコーディングサービスが利用可能
 - ✓ 外部システムとの連携が可能
- 登録申請APIを利用したサンプルサイトの開発
 - ✓ サンプルサイトを利用したパブタグの即時登録が可能
 - ✓ サンプルサイトのソースコードを公開することでAPI利用を促進